

8. 宇陀松山の水路と商いゆかり の行事にみる歴史的風致

はじめに

古代は宮廷の薬^{くすり}猟^{がり}の場とされ、古くから人の営みがあった宇陀松山。造り酒屋、和菓子屋、醤油屋、呉服屋、道具屋、薬屋など、昔から続いている商家が並んでいる。この町は、南北朝時代から戦国時代にかけて国人領主の秋山氏⁴⁹により築かれた居館と城、城下に作った町場から始まった。

宇陀松山は和歌山方面から伊勢へ向かう際、北へ向かえば伊勢本街道・表街道の分岐へ、東へ進めば高見峠を越えて松坂へとつながる好立地にある。また、近隣の農村でとれた農産物や、加工品、木材などがここに集まり、宇陀郡一円から多くの買い物客が訪れ、定期的に市が立つ商売の町として発展。近代に入ると主要な行政機関が置かれ、更なる賑わいを見せた。

明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、旧城下町の範囲が松山町、その周辺部が神戸村^{かんべむら}となった。行政区画は分かれたが、小学校や実業補習学校は共同運営しており、『町勢要覧』(昭和8年(1933))の地図でも松山町の範囲を大きく越えて神戸村の町場が入る範囲までを掲載している。松山町と神戸村、成り立ちの背景はそれぞれ異なる別の町であるが、生活圏はひとつのまとまりとして認識されている。

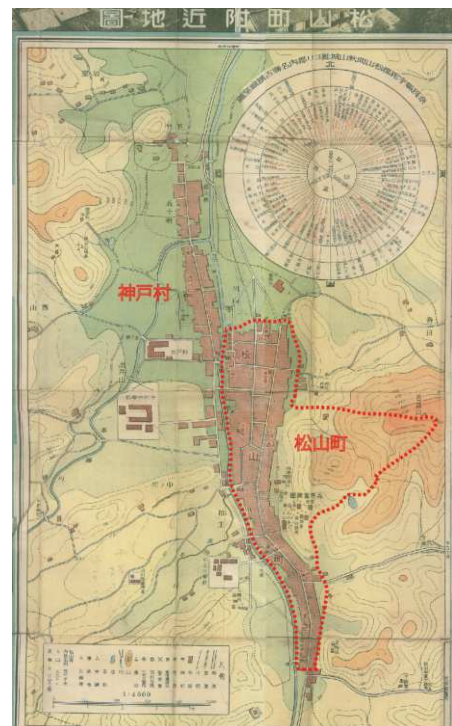
この町を読み解くうえで、水路が重要な役割を担っており、日常生活でも災害時も、その存在は欠かせない。また、町家が連続した密集市街地であるため、防火対策に関する意識の高さが、物や活動にも表れている。この地域に現在も伝わる、以下の活動について紹介する。

8-1 各大字の参会にまつわる歴史的風致

8-2 前川とその周辺に残る水路にまつわる

歴史的風致

8-3 施行にまつわる歴史的風致



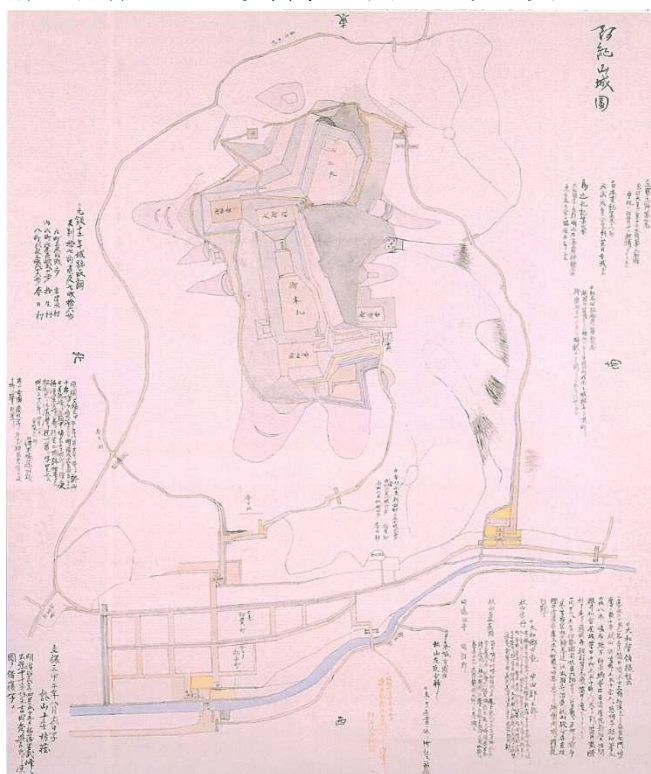
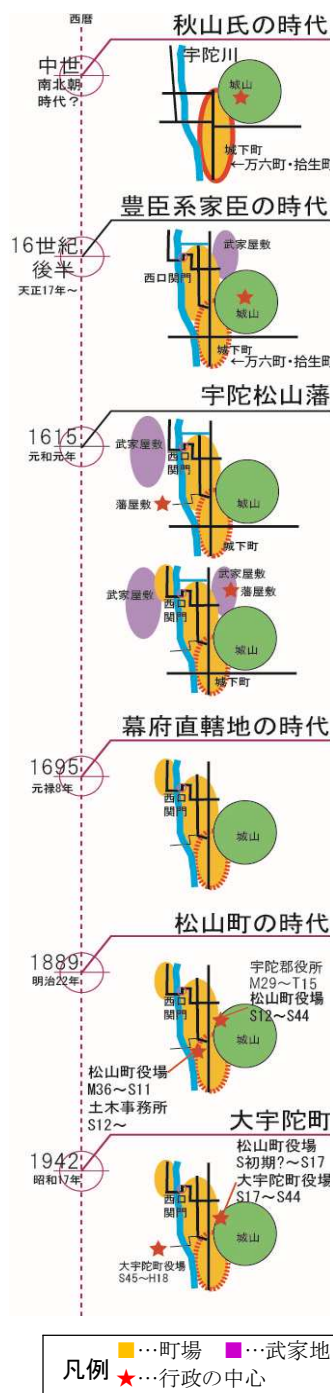
『町勢要覧』昭和8年(1933)

⁴⁹ 秋山庄(大宇陀本郷周辺)を治めていたが伊勢国司北畠氏に被官しその加護を受けて成長した国人領主。沢氏・芳野氏と並び宇陀三将と呼ばれた。

8-4 宇陀の初市にまつわる歴史的風致

宇陀松山の成立と変遷

宇陀市大宇陀には「宇陀の松山」と呼ばれる町場があり、その東に「古城山（通称「しろやま」）」がある。戦国期に始まったとされる宇陀松山は、在地領主である秋山氏⁵⁰の居城「秋山城」とその城下町「阿貴町」として誕生し、万六町から拾生町にかけて、集落が形成されて以降、左図のように変遷した。



『阿紀山城図』

天正13年(1585)、豊臣秀長が大和郡山城主となり大和の国衆を一掃、秋山氏は城を追放された。秋山城には豊臣家配下の大名、伊藤義之^{いとうよしゆき}が入って以降、幾度か城主の変遷があったが⁵¹、この間に城の改修と

⁵⁰ 「秋山氏」の古文書における標記は、阿貴山、阿紀山、秋山と、すべて「アキヤマ」と読ませるが用いる字が多様である。同じ絵図上でも、「阿紀山」城図、「阿貴」町」など、読みは同じで異なる字を当てて表現している。

⁵¹ 城主は、伊藤義之(天正13年(1585)～14年(1586)紀州合戦にて戦死)→加藤光泰(天正14年(1586)～天正16年(1588)佐和山城在番となる)→羽田正親(天正16年～文禄元年)→多賀秀種(文禄元年(1592)～慶長5年(1600)関ヶ原の戦いで石田側に加担したため改易)→福島高晴(慶長5年(1600)～元和元年(1615))と続いた。

城下町の拡張整備が行われ、町名を松山町に改めた。

元和元年(1615)、福島高晴の改易により宇陀松山城は、小堀遠江^{こぼりとおうみのかみまさかず}・守正一^{なかぼうさこんひでまさ}・中坊左近秀政^はの手により破却^{はきやく}され、以後、城は使われなかった。

そののち、織田氏⁵²が入って松山町の西、宇陀川を挟んで向かいの長山に藩屋敷を構え、その北側に武家屋敷を配置し藩政を行った。寛文11年(1670)古城山西麓^{むこう}に向屋敷、貞享2年(1685)春日神社北側に上屋敷を建設。

元禄7年(1694)、「宇陀崩れ」と呼ばれるお家騒動で第4代藩主信武が自刃、翌年丹波の国柏原へ国替えとなり松山藩は廃される。約80年の織田氏の支配ののち、松山町は幕府の直轄地となった。織田氏の国替えにより、町の人口は減少したが交通の要衝地^{しょうかまち}に変わりはなく、松山町は商家町⁵³として発達した。当時主要な産業として、絞油^{しぼりあぶら}、薬種^{やくしゅ}、合薬^{あわせぐすり}、質^{しち}、三商売(古着・古鉄・古道具)、宇陀紙、吉野葛^{うだ}などがあつた。毎月市が立ち、その賑わう様を「宇陀千軒^{せんげん}」「松山千軒^{まつやませんげん}」と呼んだ。

明治22年(1889)、松山上新町ほか13カ町が合併し松山町が成立。翌年には裁判所が置かれたほか警察署、宇陀郡役所、宇陀郡立図書館、奈良県第三公営所(奈良県宇陀土木事務所)、郵便局などが設置され、宇陀地域の中核として成熟する。明治後期には娯楽施設として芝居小屋ができ、大正6年(1917)には乗り合いバスの運行が始まった。

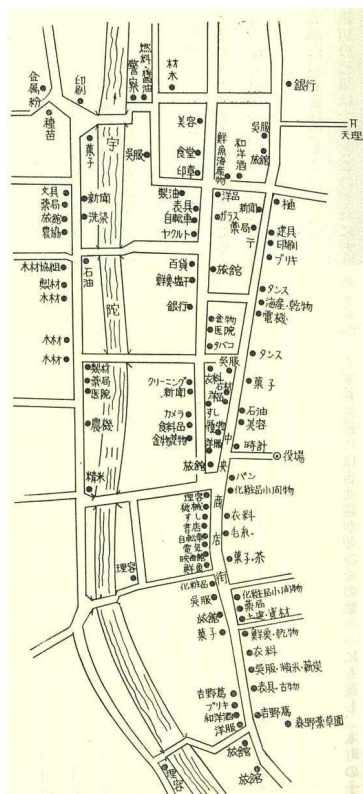
昭和31年(1956)の店の分布図を見ても(図1-1-4)、多くの商店が並ぶ。この賑わいは昭和40年(1965)まで続いた。現在は商いの形が変わり、対面販売の店舗の数は減ったが、国の重要伝統的



昭和初期頃の宇陀松山



平成3年頃、歳末の中央商店街



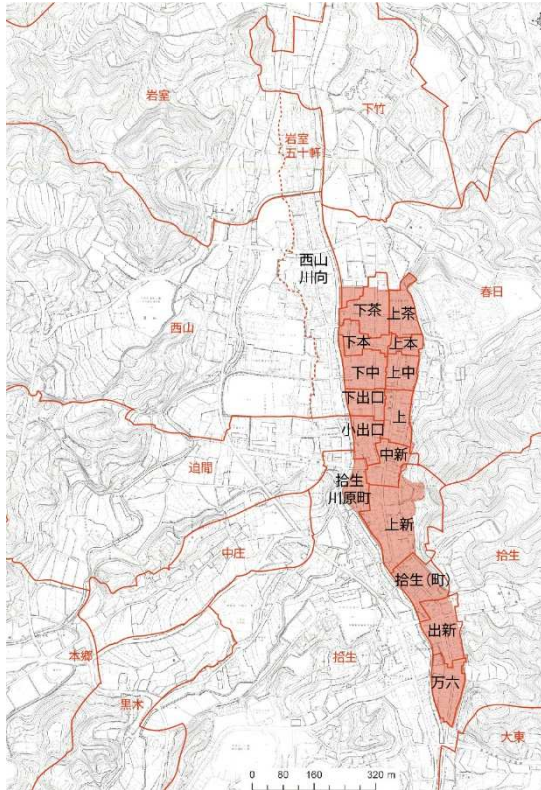
『大宇陀町史』より商店分布図

⁵² 初代藩主は織田信長の次男、織田信雄(のぶかつ)。寛永7年(1630)から織田高長が2代藩主となり、万治2年(1659)から織田長頼が3代藩主、元禄2年(1689)から織田信武が4代藩主をつとめた。

⁵³ 周辺部からの物資が集まる場所で、これらの交易により発展した商業の町。

建造物群保存地区に選定された平成 18 年（2006）以降、観光客が増加し、飲食店が少しずつ増えている。

松山・神戸の大字区分



宇陀松山周辺の大字区域図（現在の呼称）



『松山町古図』

（寛文 10 年（1670）～元禄 6 年（1693）頃）

宇陀市では、大字とよぶ行政単位がある。町内会活動等を行う際の生活共同体としてのひとつのまとまりで、左上の図のとおり赤い網掛け部分の旧城下町（＝松山町）はほかの大字に比べて細かく区画割されている。『大和国宇陀御用 中諸事覚』（元禄 8 年（1695））に「宇陀松山町数拾六町」とあり、この 16 町は上左図（「宇陀松山周辺の大字区域図」）の黒字で示した町々で、明治 18 年（1885）に「万町」と「六軒町」が合併し「万六町」に名称が変わったほかは、名称も区分も現在と同じである。

現在、町家群が残るのは、旧城下町と西山川向・岩室五十軒の範囲で、『松山町古図』（寛文～元禄 6 年頃）に記載された町場と概ね重なる。

近世からは「松山川向町」「松山五十軒町」と呼ばれ、「宇陀松山」を構成する町のひとつとして扱われていた。その間、川向町は西山村に、五十軒町は岩室村に属し、明治 22 年（1889）の町村制施行で旧城下町は「松山町」、川向町と五十軒町は「神戸村」にわかれた。

8-1 各大字の参会にまつわる 歴史的風致

(1) はじめに

旧松山町および西山川向・岩室五十軒の各大字では、「^{さんかい}参会」という行事がある。上町の年寄の交代に際して作成された引継書『取締請書連印帳』（文政10年（1828）山邊家文書）によると、「正月・五月・九月の参会はじめ町集会の際には（以下略）」という記述があり、江戸時代末期には参会の存在が確認できる。大字により日程や内容は異なるが、現在でも概ね1月、5月、9月に当番の家または集会所に大字内の各世帯の代表（家長でなくてもよい）が集まり、火伏せの神「愛宕さん（愛宕神社本殿を含む境内地または愛宕祈禱札を納めた館の呼称）」にお供えとお参りをすることを「参会」と呼んでいる。

愛宕神社のお参りが主な活動だが、伊勢神宮への代参にかかる相談や、伊勢大麻の配布を行っていることから、伊勢講を兼ねた集まりでもある。大字の全世帯の代表がほぼ揃うため、町内会関連の連絡や相談もこのときに行われる。

松山地区における参会は、「愛宕さん」の形態により3つの類型に分けられ下図のように分布している。



愛宕さんの類型別分布図

「①固定型」は、大字境に愛宕神社を建てている。ここに集まってお参りをしてから集会所等へ移動して直会と事務連絡を行う。お灯明の当番がある。

「②巡回型」は、愛宕祈禱札を館に納め、参会が行われるごとに（4か月周期）当番宅を巡回する。当番宅（または集会所等）でお参り・直会・事務連絡を行う。

「③安置型」は、愛宕祈禱札を館に納めて持ち運べる状態にあるが、大字内を巡回せず特定の家に安置されている。参会のときにその家を訪問して玄関先でお参りをしてから（普段は床の間に安置し、参会のときにあわせて玄関先へ出す）、集会所等へ移動して直会と事務連絡を行う。



①固定型の愛宕さん



②巡回型の愛宕さん



③安置型の愛宕さん

(2) 建造物

【まんろくあたごじんじゃ万六愛宕神社】

旧松山町の南端に位置する。由緒不明だが、松山町古図に現在とほぼ同じ場所に記されている。間口3間の敷地に石積みの基壇があり、瑞垣みずがきを回した中に灯籠、更に瑞垣で囲んだ中に本殿が鎮座する。

宝暦3年(1753)銘の灯籠が残り、本殿は一間社春日造、銅板葺。瑞垣の内側で参会のお供えやお参りを行い、地蔵盆では周囲に提灯を飾る。背後にある集会所で、参会や地蔵盆、寒施行などの準備や直会が行われる。



万六愛宕神社

【いでしん出新愛宕神社】

万六と出新の境界に位置する。本殿に納められた修理銘札によると、正徳元年(1711)に遷座し、現在の社殿は享和元年(1801)以来、不定期に修理を重ねているもので江戸時代後期には既にあったとみられる。参会のお供えやお参りは本殿前で行う。

境内の間口は2間ほどで、両脇に石灯籠を置き、門・鳥居、瑞垣を設けて1段高い場所に瑞垣を回しその中に本殿がある。前川までの敷地南側に板塀を設ける。本殿は一間社春日造、銅板葺。



出新愛宕神社



参会時に撮影した集合写真
(昭和35年(1960)頃)

ひろう まち
【拾生町愛宕神社】

出新と拾生町の境界に位置する。本殿内に 9 枚の修理銘札が残り、これによると元文 6 年（1741）に最初の造営を行い、現在の本殿・神門・瑞垣は大正 8 年（1919）に新調した。石組みの基壇に瑞垣・門を構え、その中に鎮座する。一間社春日造、銅板葺。参会のお供えやお参りは本殿前で行う。



拾生町愛宕神社

ひろう かわら まち
【拾生川原町愛宕神社】

『松山町古図』（208 頁に掲載）を見ると、当初は拾生土橋（今の御殿橋）の脇に鎮座していたが、『新訂大宇陀町史 史料編第 3 巻』（大宇陀町史編集委員会/平成 13 年（2001））によると大正 6 年（1917）に現在地に移転した。由緒は不明である。

切妻妻入の覆い屋の中に一間社春日造、銅板葺の社殿が納められている。参拝は覆い屋の中に総代が入り、基壇の下に大字の人が集まって見守るなかで行われる。



拾生町愛宕神社修理銘札（大正 8 年（1919）改築時のもの）



拾生川原町愛宕神社

しもほん
【下本愛宕神社】

由緒不明だが、松山町古図には現在地とほぼ同じ場所に神社が描かれている。本町通の曲がり角に境内があり、石鳥居の奥に切妻造の覆い屋が建てられ、その中に本殿がある。背後には宇陀川が流れている。

南側が恵毘須神社、北側が愛宕神社である。いずれも一間社春日造、板葺で彩色が施されている。創建時期は不明だが、『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和 34 年（1959））に現在と同じ姿で写っており、建材は相応に古い。



下本愛宕神社（右側）

かわむかいまち
【川向町愛宕神社】

黒門の川向かいに鎮座する。松山町古図には現在地とほぼ同じ場所に描かれている。神門の両脇に石灯籠を配し、金刀比羅社と並んで本殿が鎮座する。



昭和 34 年（1959）当時の下本愛宕神社

一間社春日造、銅板葺で、大正4年（1915）に本殿・末社・神門の屋根修繕をしたと『新訂大字陀町史 史料編第3巻』（平成13年3月/新訂大字陀町史編集委員会編）に記録が残る。また、宝暦7年（1757）に奉納された常夜灯があり、古くからこの場所にあったことが伺える。



川向町愛宕神社

【^{かみちや}上茶愛宕神社】

松山町の北端、道路面から少し高い場所にある。松山地区の愛宕神社の中では境内地が最も広く、狛犬が置かれ、瑞垣が巡らされている。奥に安置された本殿は木造一間社流造の銅板葺で、年代は明らかでない。



神社前の常夜灯

境内から道路に接する階段右側に「愛宕神社」と書かれた石柱があり、背面に大正11年（1922）5月建立とあり、それ以前からあったことが推測される。



上茶愛宕神社

毎月第一日曜日に氏子が集まって境内の清掃を行うほか、参会はこの場所で行われ、晴天時には境内地で直会も行う。

【^{いわむろ}岩室愛宕神社】

本郷川と宇陀川の合流点、庚申橋のたもとに建つ。『宇陀郡神社明細帳』（明治24年（1891）奈良県庁文書）には「本殿桁行式尺 梁行壱尺五寸」とあり、現在の本殿と同規模の記載があり、建物の風食等の様子から、当時からあるものと推察できる。



上茶愛宕神社本殿

毎日の献灯当番が続いており、個人によるお参りや献花が頻繁にある。



岩室愛宕神社

（3）活動

【参会（伊勢講・愛宕講）】

固定型の愛宕さんを持つ大字は、万六、出新、拾生町、拾生川原町、下本、上茶、川向町、岩室（五十軒）である。愛宕神社の前でお百灯（社殿の前に出した燭台



お百灯の様子

に数十本のロウソクを立てて火を灯す)をして、本殿にはお酒と海の物(青魚)、山の物(野菜)を供える。供物はお下がりとして宴席に出し、野菜果物は各戸に分配する。昔は正装で集まったが、現在は平服で参拝する。

固定型の愛宕神社は、3日に1日程度、宵の口に^{よい}献灯^{けんとう}当番があり、ロウソクを灯した木製の^{あんどん}行灯を手に提げて愛宕神社にお参りする。愛宕神社には前日に参った人が置いた行灯があるので、持ってきた行灯と入れ替えてこれを持ち帰り、次の当番の家へ届ける。

大字内で1軒ずつ順番を回しており、親族などに不幸事があった家は、喪が明けるまで当番は免除される。

巡回型の愛宕さんを持つのは、上・上中・上本・小出口・下出口・下中・下茶である。参会の日午前中に、当番の家または集会所に「館」を運び、そこで参会が行われる。当番の家が預かった「館」は、次の参会まで床の間に安置する。

右の写真は当番の家に安置された館の様子で、左側がこの家が持つ愛宕さんの館⁵⁴、右側が大字の愛宕さんの館である。

安置型の愛宕さんを持つのは、上新・中新である。玄関先に出された「館」にお参りしたあと、料理旅館等へ移動し宴席を持つ。

参会が終わると各戸に愛宕神社のお札(あるいは伊勢大麻)を配布する。

伊勢神宮の代参は現在も続いている。持ち帰った愛宕神社のお札は、台所に貼るか、各戸でまつてある愛宕祈禱札の館に納める。伊勢大麻は神棚に納める。

代参の順番は、固定している大字とくじ引きで決める大字がある。全世帯が代参を済ませたら、「総参り」と称して、大字全員で伊勢神宮へ参拝する。



献灯当番



安置された館



直会の様子



上新の館

⁵⁴ 江戸から明治にかけて建てられた家には、その家の愛宕祈禱札が残っていることがある。基本的に床の間に置かれ、大字の愛宕さんが廻ってきたときには床の間に左右に並べて置き、この家の愛宕祈禱札ともども、日々のお世話をする。

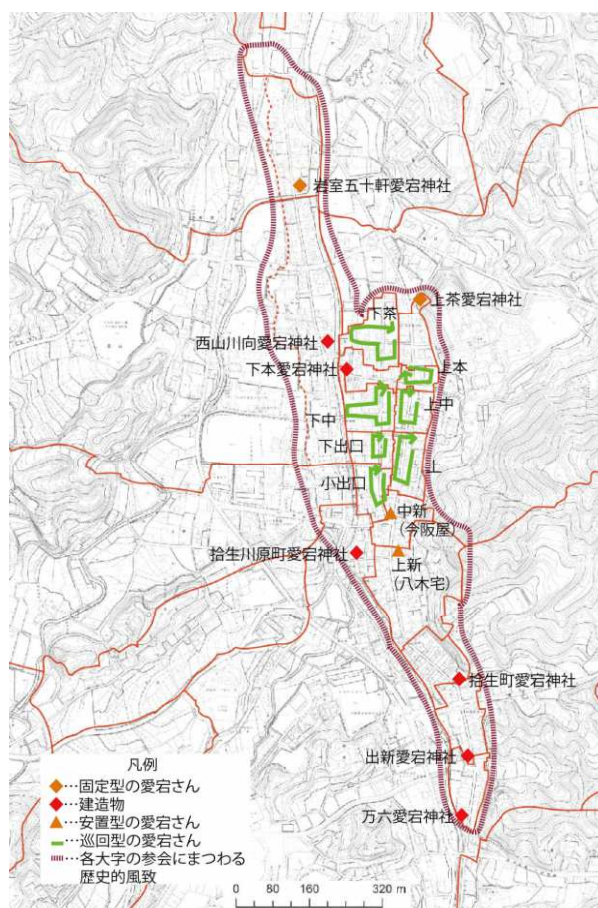
(4) まとめ

木造家屋が密集する町場において、火災は最も恐れられている災いであるため、火伏の神への信仰が篤くなるのはごく自然な流れである。

江戸時代に整備され、大字境に置かれた愛宕神社は、拾生町の愛宕神社を除き、小さな社殿に対して広めの敷地を持っている。これは、町家がひしめく商家町にあって、火除地の役割も兼ねていると考えられている。

町境に愛宕神社がない大字でも、愛宕祈禱札を収めた館を順番に祀る風習が残り、いずれの大字も年3回（上新のみ年2回）の行事を江戸時代から続け、互いの親睦を深めながら防火への意識付けを促してきた。また、固定型の愛宕神社の大字では、日々の献灯が続く。

重厚感のある町家群を舞台に行われる参会。旧当番の家から当番の家へと、大事そうに抱えられて運ばれる館の様子や、改まった服装で当番宅へ向かう大字の人たちの姿、毎日愛宕さん前で手を合わせる人の姿から、火伏の神への信仰が今も歴史的町並みの中に根付き、年季を重ねた社殿や館と共に良好な歴史的風致を形成している。



松山地区周辺の愛宕さん分布図



献灯当番



館の移動

8-2 前川とその周辺に残る水路 にまつわる歴史的風致

(1) はじめに

旧松山町の特徴のひとつとして、家の前を流れる水路がある。町の南北街路に沿って流れ、地元では「前川^{まえがわ}」と呼んでいる。今も豊富な水量を湛え、心地よいせせらぎの音が静かな町に趣を添える。

『せせらぎと手わざの町 大宇陀・松山～松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成13年（2001）3月/大宇陀町）によると、水路は城下町建設当初から織田松山藩時代に築かれたもの、近代になり位置を変えたものがある。

時代の変化に伴い姿を消したものもあるが、前川やその周辺に残る水路は、現在に至っても暮らしに根差した存在であることに変わりはない。役割や背景の異なる水路が、歴史的町並みの形成・発展過程を今に伝えている。



家の裏を通る前川



家の前を通る前川



万六裏の堰と水門

(2) 建造物

【前川（水路Ⅰ）】

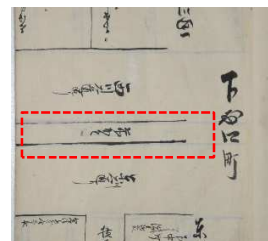
旧松山町とその周辺には様々な水路が敷設されている。町南端の万六裏の宇陀川に堰と門を設け、そこから水を引き込む。水路は町の南から北までを街路とともに貫き、町の骨格をなしている。

町の隅々まで水を届ける役割を持つが、量が多いと氾濫してしまうため、山側からの水路と交差するところで立体交差を設けて水量調整を行っている。

城下町建設時に整備されたと考えられており、『宇陀郡下出口町水帳写』（享保18年（1733））（右写真）では、道の中央に前川が描かれている。いつごろ現在の姿になったかは不明であるが、大正6年（1917）には松山自動車商会による乗り合いバス事業が始まっており、道



前川と山側から注ぐ水路の立体交差



宇陀郡下出口水帳写

路の中央に水路があると通行に支障をきたすため、その水路が振り分けられたと考えられる。『松山町外観』(昭和3年(1928)の写真では、道の両端に水路がある。)

【水路Ⅳ】

水路Ⅰから北へ続く2本の水路。西側は水路としての機能は失っているが、東側の水路は農業用水として現在も活用され、松山地区の北側の田を潤し、水利組合員により維持・管理されている。

織田家宇陀松山藩時代に、古城山西麓への藩屋敷造営により松山町北側の春日地区へ一部移転・拡張された武家屋敷地への生活・防火用水の供給のために築造されたとみられる。



昭和3年(1928)時点で道の両側に水路が振り分けられている。



水路□

【水路Ⅴ】

松山町東側に開口する3箇所から谷筋部分から宇陀川へ注ぐ水路。aは17世紀後半(1670～)の織田家宇陀松山藩時代、b、cは城下町建設時に町場東側の谷水の排水のために整備されたとみられる。この水路は現在も利用されており、ところどころに石積みが残る。



水路□b

(3) 活動

現在、前川の水は鉢植えの水や打水、道具についた泥を落とすときなど、生活用水として使うほか、農業用の水路としても活用されている。

『松山町風俗資料』(大正4年(1915)/松山町)には、採涼のため「戸外撒水ノ用ヒラルヽ状況 如何なる家にて一日三回以上の撒水を行へり。之に用ふる水は多くは前を流るヽ小川の水を杓にて扱み、其のまヽ直ぐに撒くなり」とあることから、このころには既に利用されていたことがわかる。

堰を設けて田に水を引き込んでいるのは松山地区の北側で、毎年田植えの直前(4月末の休日)に水利組合員が集まって水路の泥揚げと周辺の清掃を行っている。

また、水路のところどころに溝が刻まれ、付近には堰板^{せきいた}が置かれている。これは、防火用水として使うためのもので、火災時には東側の水路をせき止めてポンプで水を汲み上げる。毎月2回、消防の点検が行われるほか、豪雨が予想される

ときは、水が氾濫しないよう水門を閉め、災害に備える。

毎年、6月の第2日曜日には、大宇陀全体で川の一斉清掃を行っている。旧松山町の場合は水門を閉め、前川の溝の泥さらいや、石垣の間から生えた雑草を取り除く作業を中心とした維持管理をしている。『松山町風俗資料』(大正4年(1915)/松山町)によると「宇陀川ノ上流ヨリ町内の水ヲ引キテ、撒水洗濯等ニ使用セリ。全部石垣ナルヲ以テ河身浚渫ノ必要ヲ見ザルモ、塵芥ノタメニ水ノ流通セザル時ハ各自ニ掃除ヲナス。」とあり、このころには既に水路の水を止めて清掃を行っていたことがわかる。



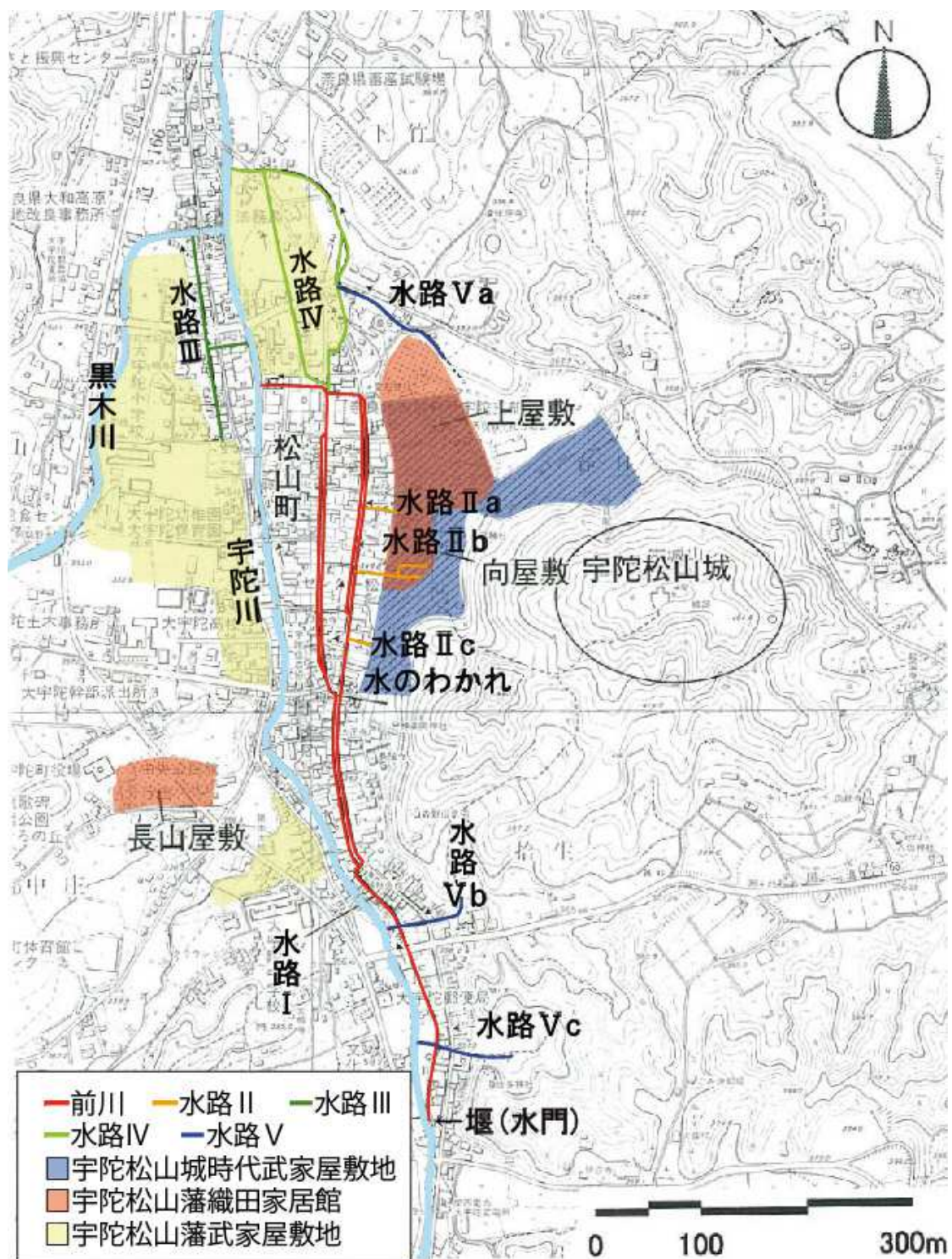
打ち水風景



水路の泥揚げ作業

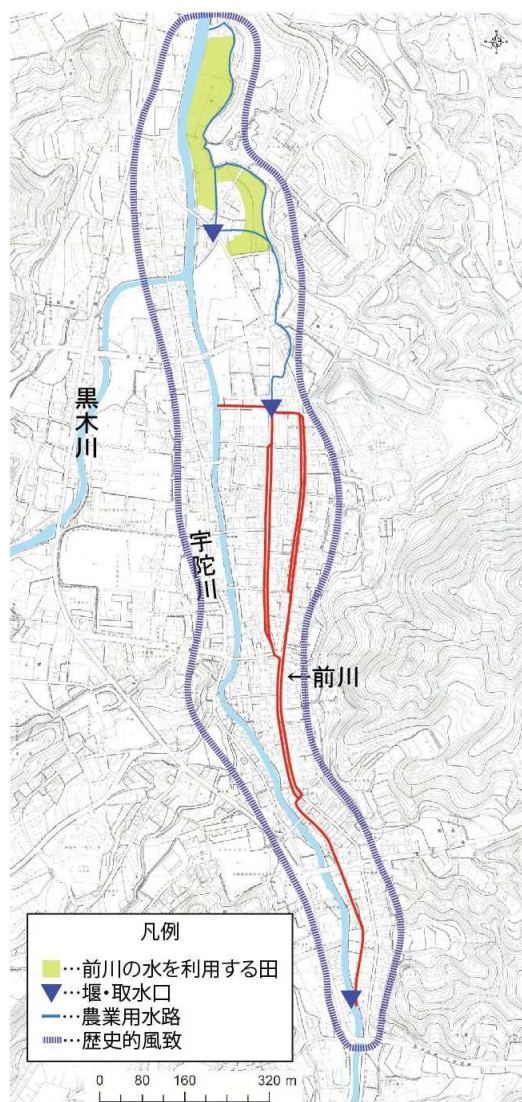


火災時は前川に堰板を入れる

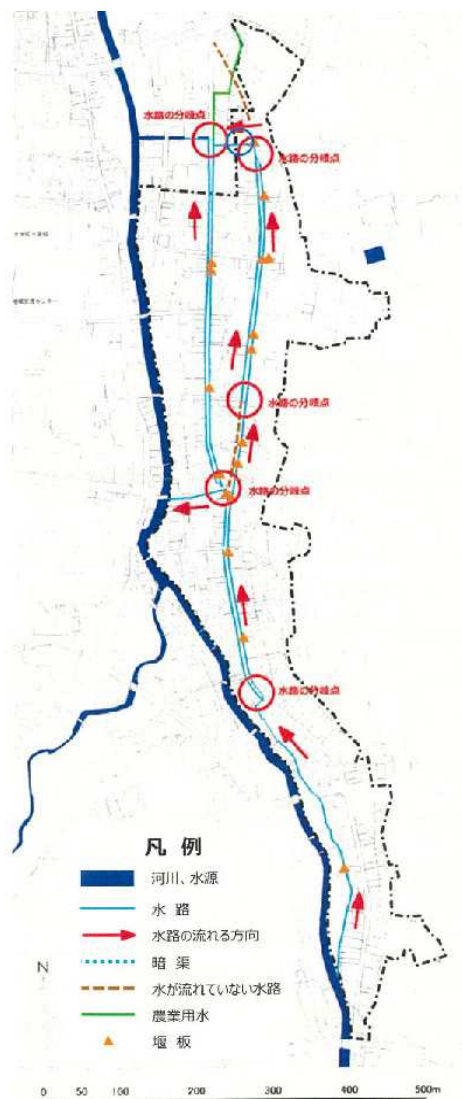


旧松山町と周辺町場の主な水路

※出典：上野邦一 編集『せせらぎと手わざの町 大宇陀・松山～松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』平成 13 年（2001）3 月/大宇陀町教育委員会 発行/



前川が潤す水田の分布図



水路の現状および堰板の分布

(4) まとめ

宇陀川から引き入れた水は、松山の町を網羅し、花の水やりや打ち水や道具類の泥落としなど日常的に使われるほか、防火用水、農業用水の役割を果たして再び宇陀川へ戻る。町や田の隅々へ水を送れるよう、毎年の泥揚げ作業は欠かせず行われ、その機能や美観が維持されてきた。

水路の歴史を遡れば城下町を整備した近世初頭に辿り着き、当初は道の中央を流れていたが、近代までに現在の姿となったと考えられている。町の中を流れる水路は、松山地区の景観を考えるうえで重要な要素であるだけでなく、軽快なせせらぎの音や水路とともにある暮らし方が今も息づいており、良好な歴史的風致を形成している。

せんぎょ 8-3施行にまつわる歴史的風致

(1) はじめに

寒施行は野^の施^せ行^{ぎょう}とも言い、「施行」がなまって「せんぎょ」と呼ばれている。かつては近畿一円で行われていたとみられる稲荷講の一種で、落語や絵本でその様子が描写されている⁵⁵。現在は奈良県五條市大^{おお}塔^{とう}や、宇陀松山で存続が確認され、宇陀松山でも万^{まん}六^{ろく}、拾^{ひろ}生^う町^{まち}、上^{かみ}新^{しん}は実施しているが、それ以外の大字については、50年ほど前から今日までに行われなくなった。地域によっては商売をしている家が個別に施行に回っていたとも聞が、宇陀松山では大字単位で実施している。

施行の行先について聞き取りを行ったところ（休止中の大字も含む）、行き先は主に山の上や中腹で、大字ごとに多少行き先が異なるが、全てを重ねると概ね宇陀松山周辺の人里と里山の境界が見えてくる。

(2) 建造物

【佐多神社本殿】

社殿の中に棟札があり、明治29年（1896）建築。古絵図には記載がなく、このときに境内地一体が整備されたとみられる。本殿は三間社流造、銅板葺。木鼻や絵様など細部意匠まで丁寧に作り込んである。

万六町で守る神社で、寒施行ではすべての大字がこの神社を訪れている。



佐多神社本殿



昭和戦前の佐多神社の様子（酒蔵の背後にある）

【大願寺本堂】

由緒不詳、国道166号線と国道370号線との分岐点に位置する。宇陀松山藩主織田家の加護を受けた寺で、毘沙門堂は第4代藩主織田信武の発願と伝わる。現在の本堂は上棟記念に寄進者へ配布された榎^{つち}によると、昭和5年（1930）再建と柄^えに記されている。右写真）木造入母屋造、棧瓦葺。

境内には寒施行で回る場所である稲荷社、白山神社のほか、仏足石、行者堂、おちゃめ庚申が残る。



大願寺本堂



柄に記された上棟日

⁵⁵ 上方落語『吉野狐』では若旦那が芸妓を連れて奈良町で豪遊中に野施行をする場面がある。『こんこんさまにさしあげそうろう』森はな 作/ 梶山俊夫 絵/1982年 PHP 研究所/ 狐の側からみた寒施行の様子を描写している。

【白山神社】

大願寺境内の小高い台地に鎮座する神社。『宇陀松山藩御用部屋日記』に、加賀国の白山神社を勧請し、延宝3年（1675）9月10日竣工祝いに米三石を供えたとある。正徳5年（1715）の年号が記された棟札が残る。木製の神門と瑞垣で囲んだ中に一間社春日造、銅板葺の社が安置されている。



白山神社

【松山会館】

棟札によると、明治36年（1903）に竣工した旧町役場。木造二階建（吉野建て）、片側入母屋造、棧瓦葺。木造、漆喰、屋根瓦と、日本の伝統的な建材を使い周囲になじむ外観を持つが、小屋組みはトラス造で、舶来技術を取り入れた建物である。



松山会館

寒施行、参会など地域の寄り合いで利用するほか、宇陀松山まちづくり協議会の拠点に使われている。

（3）活動

【寒施行】

「せーんぎょーや、せーんぎょーやー」「おいなりさんのせーんぎょーやー」1月下旬の大寒から節分の間にかけて、空気の冷え切った夜の里山に響く子供たちの声。大字の男性と子供とで編成された短い隊列が、懐中電灯とお供えをめいめいに持って大願寺の急な階段を登っていく。商家町宇陀松山に残る稲荷講の一種、^{だいじ}寒施行の風景である。



大願寺稲荷社

寒施行が始まった時期は定かではないが、『松山町風俗資料』（大正4年（1914）/松山町）によると“寒入りノ日ニハあぶらげヲ食フ 寒参り、寒施行（寺院の晩（ママ）僧）、寒稽古は種々ノ方面ニ行ハル”とあり、このころには寒の入りから節分までの間に行われていたようである。



社や祠にお供えをする

施行当日は昼過ぎから、松山会館や万六会館等、集会所等に集まり、準備を始める。小豆のお握りを

握り、油揚げを折に入れ、集会所に近い神社（万六は佐多神社、上新・拾生町は長隆寺）から時計回りに、里山と人里の間にある稲荷社や祠 12～13 箇所に分けて回る。

山に食べ物が乏しい時期に狐に施しを行い、商売繁盛を願う伝統行事である。行列はひと通り分けて回ったあと、集会所に戻り直会をする。

直会の食事はきつねうどん（万六・上新）、鯖飯と粕汁（拾生町）など、大字により違う。かつては夜に回ったが、安全のため現在は明るいうちに回り終えるように段取りをしている。



長山の稲荷社



城山の稲荷社への道

（４）おわりに

商売繁盛を願い、商家が中心になって行っていたという寒施行。極寒の中、人里と里山の境にある神社あるいは祠（跡地等も含む）をまわり、食べ物のない時期の狐たちに施しをする行事は、荷物を抱えて長距離を歩く過酷な面もある。少子高齢化の波による存続の危機に晒されながらも、工夫を重ねて続けられている。

お供えを置く場所となる社殿や、準備・直会の拠点となる建物は長い歴史を持つものが多く、これらの活動とともに良好な歴史的風致を形成している。

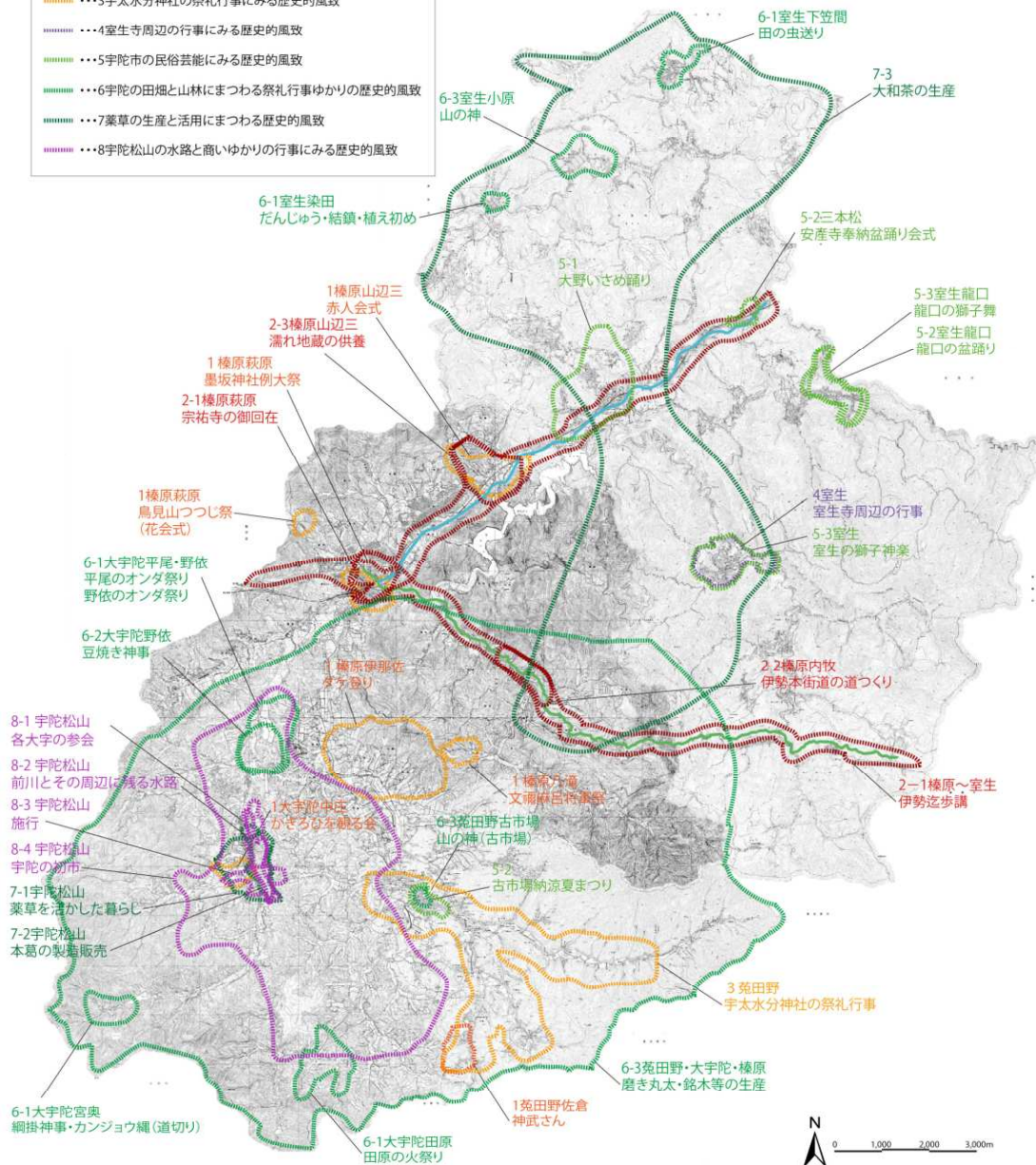


高天原のお供え場所



直会の様子

- 凡例
- ・・・1記紀・万葉ゆかりの地の営みにみる歴史的風致
 - ・・・2伊勢街道の旧宿場町の営みにみる歴史的風致
 - ・・・3宇太水分神社の祭礼行事にみる歴史的風致
 - ・・・4室生寺周辺の行事にみる歴史的風致
 - ・・・5宇陀市の民俗芸能にみる歴史的風致
 - ・・・6宇陀の田畑と山林にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致
 - ・・・7薬草の生産と活用にまつわる歴史的風致
 - ・・・8宇陀松山の水路と商いゆかりの行事にみる歴史的風致



はっいち 8-4 宇陀の初市にまつわる 歴史的風致

(1) はじめに

「商売繁盛じゃ、笹もってこい」の声が下町通りに響く 2 月。^{しもほん}下本の恵毘須神社において、「宇陀の初市」が開催される。「えべっさん」の愛称で親しまれており、恵毘須神社の境内にて祭典等が執り行われるほか、^{きつきよ}吉兆⁵⁶の販売が行われ、福を求めて多くの人が集まり、参道には露店が並ぶ。

『^{やまとのくににうだごようじゅうしよじおぼえ}大和国宇陀御用中諸事覚⁵⁷』によると毎月 6 度（3 日、8 日、13 日、18 日、23 日、28 日）、宇陀松山に市が立ち、宇陀郡一円の人が買い物に来たとある。また、『^{いちばいっけんしよしよもつ}市場一件諸書物⁵⁸』（安永 9 年（1780）上 山邊家文書）によると、3 のつく日は上中・上の両町で、8 のつく日は下中・下出口の両町で市立てが行われていた。年の初めに立つ市なので初市と呼ばれ、その名残が今も続いている。

本来は 2 月 8 日の開催で、戦前は会社も学校も半日休みにして参拝していたが、戦後は休日扱いでなくなり平日の集客が年々落ち込んでいた。そのため、より多くの集客を期待して平成 30 年（2018）より、祭典のみ 2 月 8 日に行い、吉兆の販売と露店は祝日の 2 月 11 日になった。

(2) 建造物

【恵毘須神社 本殿】

えべっさんの愛称で親しまれている下本恵毘須神社だが、本来は下本愛宕神社の境内社である。初市が盛況になるにつれ認知度が上がり、恵毘須神社の名称で定着したとみられる。

本殿は覆い屋の中に、愛宕神社と並んで納められている。一間社春日造、板葺。木鼻や墓股などの細部に彫刻と彩色を施しており、^{しらき}素木（塗装を施していない



恵毘須神社本殿

⁵⁶ 吉兆とは「いいことが起こる兆し」を指す言葉だが、宇陀市内の初市（えべっさん）においては「いいことを招き入れるための飾り（縁起物で飾った笹、熊手など）」のことを吉兆（きつきょう、訛って「きつきよ」と呼ぶ。

⁵⁷ 『下竹山岡家文書』元禄 8 年（1695）。戸数、人口、酒屋数・大工数や六斎市等の記載があり当時の松山地区の状況がわかる。

⁵⁸ 『上 山邊家文書』安永 9 年（1780）。

表面仕上げの木材）で建てた社殿が多い松山地区内では珍しい。『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年（1959））に現在と同じ姿の写真が掲載されており、建材も相応に古い。



『大宇陀町史』より

【植田家住宅（かぎや）】

木造つし二階建、切妻、棧瓦葺で丸い虫籠窓が目をはく。『保存対策調査報告書』によると、江戸時代後期の町家とある。建物に残る痕跡から、表構えはすべて刷り上げ戸であった。江戸時代末期の典型的な町家である。



植田家住宅

屋号を「かぎや」といい、絞り油の製造販売をしていたため、「あぶらや」とも呼ばれている。宇陀の初市では、この家の前に露店が並ぶほか、吉兆を持った人々がこの建物の前を通る。

【久保医院】

文化9年（1812）の愛宕祈禱札^{きとうふだ}が残り、そのころの建物とみてよい。つし二階建、切妻、棧瓦葺の町家。

幕末に大阪の適塾で医術を学び、奈良県で最初に種痘をした医師、久保良平が営んだ医院で、現在でも良平の子孫が町医者として地域医療を支えている。

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人々がこの建物の前を通る。



久保医院

【喜楽座^{きらくざ}】

明治32年（1899）に代議士の演説会で利用したと記録にある⁵⁹。当初は芝居小屋として建てられたが、のちに映画館に改修し、周辺地域の娯楽施設として親しまれてきた。



喜楽座内部

⁵⁹ 『尾崎一行演説会諸事控』周旋人/明治32年5月31日 尾崎行雄代議士の政談大演会開催にかかる段取りを記録した文書の中に、「芝居小屋借料金参円」とある。

木造二階建、片側入母屋造、棧瓦葺き、梁間 6 間、桁行 10 間の規模で、芝居小屋の中では小規模な部類に入る。天井桟敷と舞台があり、舞台上手の袖に太夫座、二階に楽屋が残る。舞台下手には大道具を収納し、柱には右写真のような興行成功記念（興行が成功裏に終えたことを記念した際に芝居小屋に残す関係者の書き付け）の墨書が残る。元号がなく三八年とだけ記されているが、少なくとも昭和 38 年（1963）にはこの建物が存在したことを示す。



舞台下手の墨書、元号がなく三八年と記されてある

格天井や二階手摺など、意匠を凝らした箇所が随所に見られるほか、映画館に改装した際に白と若草色を基調にしたペンキを塗った箇所がある。かつては天井に地元商店の広告をあしらったトタン板が張られており、その一部が建物内に保管されている。

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人がこの建物の前を通る。

【よしむらしゅぞう芳村酒造】

『保存対策調査報告書』によると、昭和 16 年（1941）竣工、木造二階建、片側入母屋造、棧瓦葺。石張りの腰壁や木枠の窓ガラスなど、近代の要素を取り入れた町家。千代乃松の銘柄で知られる造酒屋の本宅で、南に酒蔵 3 棟が並び仕込みの時期になると米を蒸す香りが漂う。



芳村酒造

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人がこの建物の前を通るほか、店舗の神棚に笹を飾っている。

【くぼほんけしゅぞう久保本家酒造】

明治 42 年（1909）竣工（上棟札より）、木造一部 3 階建、一部表家造、棧瓦葺。多様な意匠の格子を嵌め、虫籠窓や揚げ塗など意匠を凝らした町家。3 列 9 室と間口が大きく、北面に式台を持つ。

西側に仕込み蔵があり、酒蔵カフェを併設している。

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人がこの建物の前を通るほか、店舗の神棚に吉兆を飾っている。



久保本家酒造

【万法寺本堂】

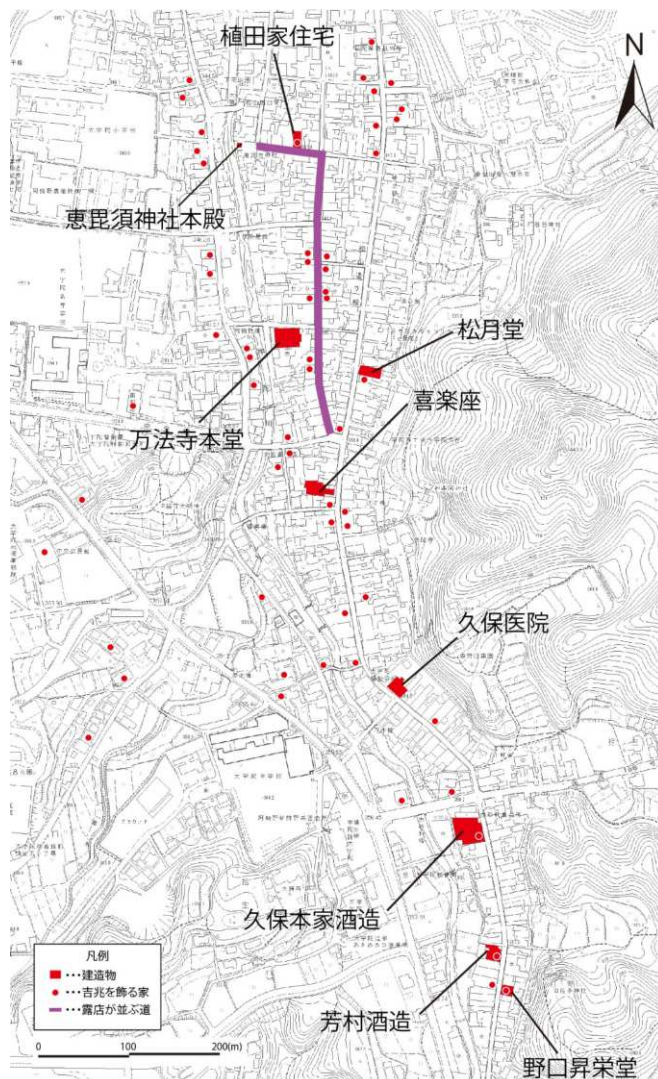
近世初頭、城下町として整備された町中に位置する浄土真宗本願寺派の寺院。寺伝では天正13年（1585）創立という。建物に残る墨書や瓦刻銘によると、本堂は承応2年（1653）建立。江戸初期の真宗本堂の発展過程を知るうえで貴重な遺構として、平成5年に奈良県の有形文化財（建造物）に指定された。初市の際、寺の前に出店が並ぶ。



万法寺本堂

（３）活動

【宇陀の初市】



建造物および吉兆を飾る家の分布（詳細図）

宇陀の初市は、毎年2月8日10時～、下本自治会主催で恵毘須神社の祭典が行われる。2月11日には午前0時から午後8時まで恵毘須神社社務所で「吉兆」の販売が行われるほか、かつて市を立てることが認められた下中・下出口を含む下町通り（小出口～下茶）と、参道にあたる本町通（下本～下茶）に露店が立つ。

射的やスマートボール、回転焼屋など娯楽や食べ歩きの出店が増えたものの、なかには乾物屋、手芸屋など生活雑貨の店があり、かつての市の名残を伝えている。

恵毘須神社には、近隣の人が前年の吉兆を携えて新たな吉兆を買い求めに来る。恵毘須神社は密集市街地のため、神社の周囲には駐車場がない。そのため遠方からの参拝者は

道の駅などに車を停め、吉兆を手にとって松山重伝建地区内を歩き、久保医院・喜楽座・万法寺・植田家の前を通過して境内に入る。手水舎の奥に前年の吉兆を入れる箱があり、そこへ吉兆や古い札を入れて、本殿の前へ進む。賽銭を入れ、参拝をしたのちに、社務所で新たな吉兆を購入する。

吉兆にはくじがついており、境内のくじ引き会場でくじを引き、景品を貰う。境内の中央には暖を取るための焚火があり、火を囲んで歓談したあと、露店をのぞいて帰宅する。子供たちにとっても楽しみな行事のひとつである。

吉兆は、大宇陀一円で商売をしている人が買い求め翌年まで神棚などに飾る。芳村酒造、久保本家などの店舗をのぞくと吉兆が見える。



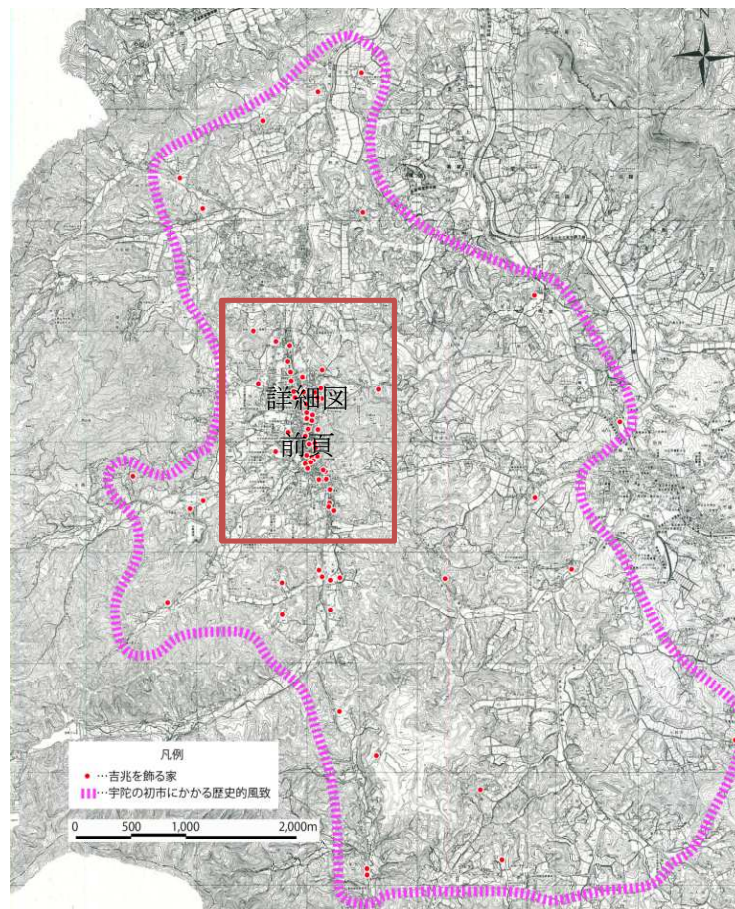
焚火で暖を取る参拝者



神棚に飾られた吉兆



下町通りに露店が並ぶ



宇陀の初市にかかる歴史的風致と吉兆を飾る家 令和4年(2022)2月11日調べ

宇陀市内のえべっさん

商売繁盛を祈願し、縁起物を売る「えべっさん」は、宇陀市内では、榛原・古市場・松井の3箇所で開催されている。いずれも、商売繁盛を願い、恵比須神社で祭典を行い、吉兆を販売する点は共通している。神社周辺には出店が建ち並び、お客を呼び込む声などがより一層の賑わいを創出している。

古市場のえべっさんは2月7日に開催される。宇太水分神社境内にある恵比須神社の前に吉兆が並べられ、門前に出店が並び、地域の人が笹を求めて訪れる。松井では第1日曜日の開催で、松井の恵比須神社周辺に出店が並ぶ。



古市場・松井のえべっさんの会場



宇太水分神社 門前の様子



古市場の吉兆

榛原は、2月10日に開催される。松井の恵比須神社にあった御神体の石が水害で流され、行き着いた先が榛原の恵比須神社である、という伝説が伝わる。榛原駅前商店街に出店が並び、参拝客のほかに学校帰り・仕事帰りの人も入り混じって大いに賑わいを見せている。



榛原恵比須神社前の風景



駅前商店街の活況



榛原の吉兆写真



榛原のえべっさん（令和5年2月10日開催時）

(4) おわりに

宇陀の初市は、もとは江戸期に松山の上町通りと下町通りで交互に市を立てていたときの名残で、あるときから行事として定着したと考えられている。運営体制や露店に並ぶ品物は時代に連れて変わっているが、参拝客や買い物客を迎え入れる町家の連坦^{れんたん}は大きく変わらず、前の年に買った笹を携えて恵毘須神社へ訪れる人々と、歴史の積み重なりを感じられる環境で活動が続けられている。



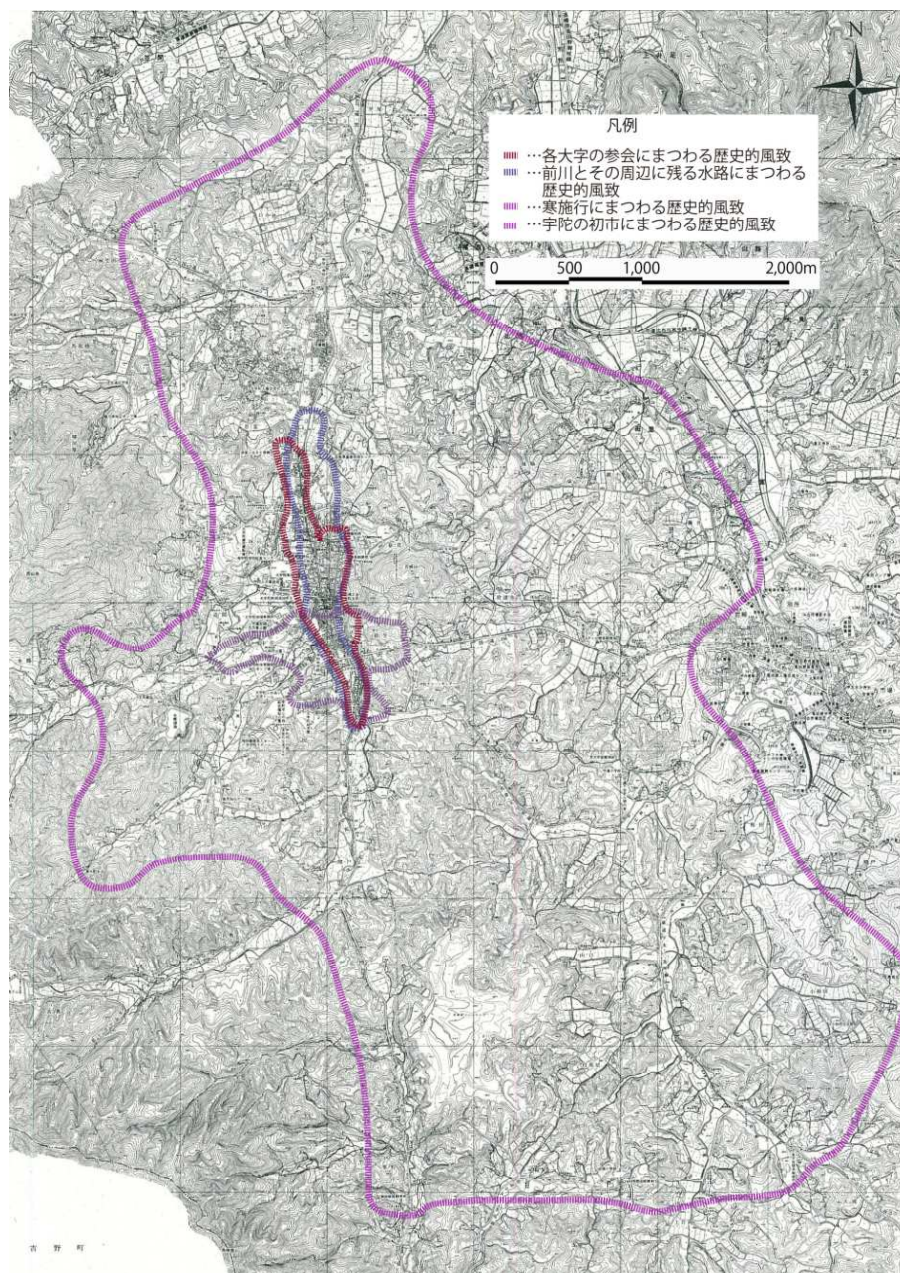
宇陀松山の吉兆



出店は夜8時頃まで営業する

おわりに

中近世から近代にかけての歴史的建造物が集積した町並みのなかにおいて、火伏・火除けにまつわる伝統行事や、家の前（あるいは背後）を流れる水路を取り入れた暮らしが今も続いている。複数の大字が共同でまもる神社の活動や、商売繁盛への願いを込めた活動など、多くの人々が互いの暮らしに関りながら、適切な距離感を保つ生き方が建造物とともに受け継がれている。これら一連の活動と建造物が一体となり、宇陀松山の歴史的風致を形成している。



宇陀松山の商いゆかりの歴史的風致

コラム 10 水のわかれと氏子域

松山地区内の前川は、^{なかしん}中新の中央で上町通りと下町通りに分岐する。まちの人たちはこの場所を「水のわかれ」と呼び、水の流れに従い場所を表現するため、南側（上流）を「上」、北側（下流）を「下」と言う。

旧松山町では水のわかれから上^{かみ}が神楽岡神社の氏子域、下^{しも}が春日神社の氏子域となり、それぞれ複数の大字で協力しながら、祭礼行事を行う。春日神社は祭神の数が多いため、行事の数が多い。

大字の中央に「水のわかれ」がある中新に限り、住民は同じ大字でありながら南北にわかれて祭礼等に参加している。



旧松山町周辺の氏子域

神楽岡神社の祭礼行事

神楽岡神社は、古城山の山裾に鎮座する。由緒等は定かでなく、『大和宇陀御用中諸事覚』（元禄 8 年（1695））や近世の絵図には「大將軍」とあるが、明治 43 年（1910）に神楽岡神社の名称を刻んだ石柱があることから、このときまでに神社の名称が変わった。

年間行事は右表の通りで夏祭り、秋祭り、年越しの 3 つで、各大字から選出された役員が、責任役員（6 人の役員をまとめる氏子総代、1 年任期で順番に担当する）を中心に運営している。

神楽岡神社の祭礼行事一覧		
名称	日時	内容
夏祭り 宵宮	7/15 19 時～	
夏祭り	7/16 10 時～	祭典
秋祭り 宵宮	10/15 19 時～	
秋祭り	10/16 10 時～	祭典（太鼓台巡行は直近の日曜日）
年越し	12/31 21 時～	参道ライトアップ
【氏子】拾生内垣内、万六、出新、拾生町、上新、拾生川原町		



昭和初期の秋祭りの様子



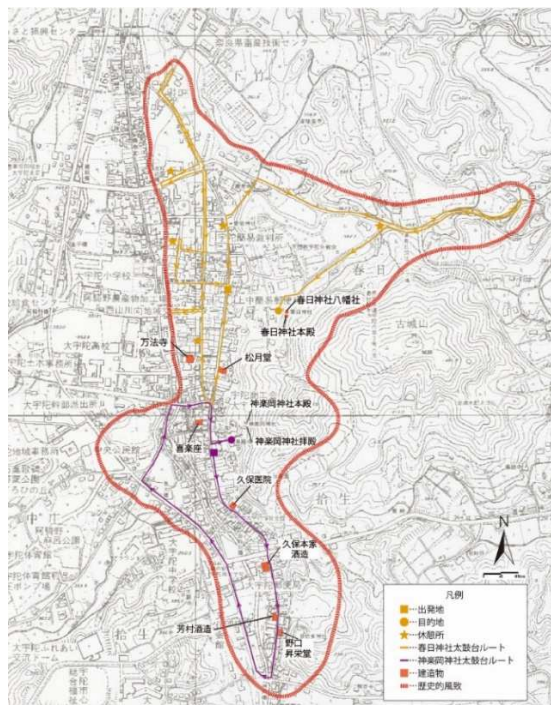
神楽岡神社 秋の祭典

春日神社の祭礼行事

本町通りを東進し、春日門跡から坂道を上ると杉の大木に囲まれた高台に至る。春日神社の境内がそこにあり、境内社に八幡神社、織田神社、三社、阿弥陀堂、伊太木曾神社がある。

各大字より氏子総代を1名出し、氏子総代会を組織し、祭典等の運営にあたる。氏子総代会の会長は1年の任期で、会長が在籍する大字が年番として事務局と共に運営を支え、年番はとんどのときに交代する。

年間の行事は右表の通り、節分祭、夏祭り、秋祭りにそれぞれ祭典とお百灯を行う。お百灯に使う燭台は大字ごとに用意するが、最も古いもので昭和9年（1934）の墨書がある。少なくともそのころから続いている行事であることが推測される。



神楽岡神社・春日神社太鼓台 巡行ルート

春日神社の祭礼行事一覧		
名称	日時	内容
とんど	1/14 に近い日曜日	当番交代
節分祭	2/3 10時～ 17時～	祭典 お百灯
祈年祭	2/20	祭典
初午	3/10 10時～	祭典
夏祭り	7/8 10時～ 17時～	祭典、 お百灯
夏越	8月末の日曜日	境内地整備
八幡祭	9/15 10時～	祭典
秋祭り	10/8 10時～ 17時～	祭典、 お百灯
新嘗祭	11/26 10時～	祭典
年越し	12/31 21時～	

【氏子】下出口、下中、春日旧、下茶、春日新、上茶、上本、上、中新、小出口（下本、上中）



春日神社とんど



春日神社節分お百灯



燭台の墨書



春日神社太鼓台巡行



御供まき風景